

学校行事と総合的な学習の時間を貫く資質・能力の育成

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科・公民科
山本 智也

学校行事と総合的な学習の時間を貫く資質・能力の育成

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科・公民科
山本 智也

要約

広く学校行事と呼ばれる領域は、集団活動を通して人間形成を図るだけでなく、知的な成長をもたらす学習活動と連関させて展開することが可能である。その顕著な事例として、ここでは本校が長年にわたって維持・発展させてきた「地域研究」を取り上げる。地域研究は、宿泊を伴う学校行事であると同時に、その半年間に及ぶ学習過程が総合的な学習の時間として位置付けられている。学年ごとにフィールドを変えながら、テーマ設定、フィールドワーク、まとめ・発表というプロセスをくりかえし経験することで、生徒は探究的な学習を自律的に行うための資質・能力を身に付けることができる。

キーワード：総合的な学習の時間、学校行事、探究的な学習、フィールドワーク、資質・能力

1 はじめに

1.1 問題の所在

学校行事が重要な教育的意義を有することについては、一般に、生徒・教員双方から広く認められている。本校においても、5月の校外学習、6月の音楽祭、9月の体育祭、11月の文化祭、さらに中学では2月の弁論大会と、いくつもの学校行事が1年間にメリハリを与えている。そして、それらを3年間ないし6年間を通してスパイラル状に経験していくことで、生徒は大きく成長していく。学校行事が単に楽しい、仲間ができる、良い思い出になる、という以上の意義をもつことは、本校の生徒・教員にとって自明といってもよい。

では、生徒は学校行事を通してどのような学習経験をしているのか。従来本校における研究では、たとえば「ヒドゥン・カリキュラム」という用語を肯定的に転用しながら、その経験の全貌を体系的に捉えようとする試みがなされてきた(たとえば図1)。その際主に着目されてきたのは、学校行事が自己形成(自分づくり)や心の安定・成長につながる側面である^[注1]。また、研究者の参与観察により、異年齢構成による学校行事がリーダーシップを育成する機能を明らかにした研究もある^[注2]。その一方、学校行事が教科・領域を横断した学習活動へと連なる側面については、個別の事例報告にとどまっている^[注3]。本校におけるいくつかの学校行事は、集団活動を通じた心の成長にとどまらず、教科・領域を超えた探究的な学習や課題解決的

な学習の基礎となる資質・能力を形成してきた。本稿はこの仮説を基に、学校行事のもつ学習活動としての側面を総合的に描き出そうとするものである。

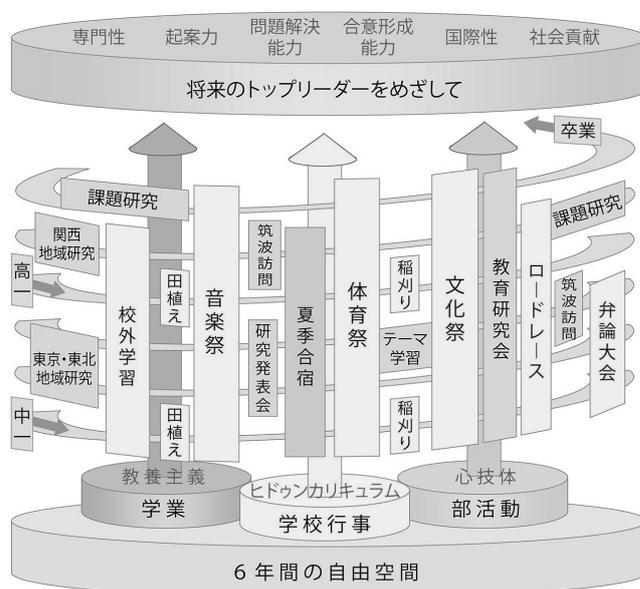


図1 6年間の自由空間 (本校ホームページより)

学校行事をこのように捉えると、実際の学習活動は「総合的な学習の時間」ときわめて密接な関係をもつことになる。「総合的な学習の時間」が創設されて20年がたとうとしており、この間、本校でも様々な教育活動のプログラムが新たに開発されてきた。とはいえ、ただ新規な教育活動を接ぎ木していただくだけでは、高い

Fostering qualities and abilities through school events and the Period for Integrated Studies.

教育効果は見込めない。本校において探究的な学習や課題解決的な学習を実質化する土台となっているのが、学校行事を軸として有機的に連関する一連の学習活動である。それらは、ときに教育的意図の外で暗黙裡に形成されてきたものであり、学校文化と緊密な関係にある。この点を視野に入れつつ、広く学校行事と呼ばれる領域が、総合的な学習の時間と連関しながら、学習活動としてどのような意義をもちうるのか、あらためて捉え直してみたい。

1.2 本稿の目的と対象

本稿の目的は、校外学習（地域研究）という学校行事に焦点化して、そこで生徒が何を学んでいるかを素描し、その教育的意義を資質・能力の観点から明らかにすることである。校外学習の一形態である「地域研究」は、本校において「特別活動」と「総合的な学習の時間」との領域横断的な活動として定着している。したがって、本稿は特別活動（旅行・集団宿泊的行事）と総合的な学習の時間を効果的に連携させる方策に関する提案ともいえる。

ところで、一般的に学校行事は特別活動に分類される。本校の地域研究でも、学年集団が校外で宿泊しながら活動する場面については、特別活動の一環としての学校行事（旅行・集団宿泊的行事）とみることができる。しかし、地域研究の場合、当日だけでなく前後の6か月以上が事前学習と事後学習にあてられている。この部分については、特別活動の範疇を超えた学習の場面といえる。宿泊行事を中核としながら、集団生活の体験と、知的な成長につながる学習の過程が地続きで連動しているのである。

もともと、特別活動と総合的な学習の時間はねらいと位置づけを異にする教育活動であり、安易な混同や流用は避けなくてはならない。ここでまず、両者の目標の相違を確認しておこう。

特別活動の目標（高等学校・平成21年版）は次のとおりである。

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う【注4】。

これに対して、総合的な学習の時間の目標（高等学

校・平成21年版）は次のとおりである。

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする【注5】。

両者を比較すれば基本的な性格の相違は明らかだろう。たとえば、特別活動が「望ましい集団活動」を目標達成の手段とするのに対して、総合的な学習の時間は「横断的・総合的な学習や探究的な学習」を手段とする。一方、生徒の自主的または主体的な態度を重視する点や、「人間としての在り方生き方」につなげる点は、共通している。

実践的な観点からは、両者の関連性は深く、従来から効果的な連携が目指されてきたところである。慣例上「学校行事」と呼ばれてきた地域研究も、特別活動としての狭義の学校行事にとどまらず、「横断的・総合的な学習」「探究的な学習」としての学習場を伴っている。このように捉えたうえで、本稿は伝統的な学校行事を一続きの学習活動として成立させる様々な仕掛けを示すことを意識する。

1.3 本稿の構成

以下では、まず地域研究における学びの諸側面を分析する（第2節）。続けて、地域研究を通じた学習を総体的に捉え、資質・能力の育成という観点から考察を加える（第3節）。最後に、地域研究の意義についてまとめ、学校行事と総合的な学習の時間を貫く資質・能力を捉える際の課題を示す（第4節）。

2 地域研究における学びの諸側面

2.1 概要

本校には「修学旅行」がない。中1～高2の5つの学年が同じ週に「校外学習」を実施する。中1・高1の校外学習は登山など野外活動がメインであり、新たな仲間と人間関係を築き、集団生活を経験することに主眼がおかれている。そのため、クラス全体または学年全体で行動する場面が多い。これは「望ましい集団活動」を通じた学年びらきの意味をもつ校外学習であり、総合的な学習の時間ではない。

これに対して、中2・中3・高2で実施されるのが「地域研究」である。これは、4～6人程度の班ごとに研究テーマを設定し、取材や現地調査などフィールドワークを実施して、その成果を報告書やポスターにまとめる活動である。中2は東京地域研究、中3は東北地域研究、高2は関西地域研究と、学年ごとにフィールドは変わる。最長で4泊5日（高2の場合）もの期間が、ほとんど班ごとの行動にあてられる。地域研究は校外学習の一形態だが、「研究」の名を冠していることからわかるように探究的な学習としての性格をもち、事前・事後の一連の学習が総合的な学習の時間に位置付けられる。

2.2 学習活動としての特徴

地域研究は、探究的な学習のプロセスを経験し、情報収集やプレゼンテーションなどのスキルとマナーを習得する学習活動である。グループ活動を通して、各自の得意分野を生かし、苦手分野を補うという面では協働的な学習の側面ももっている。

実際、中2・中3と2年続けて地域研究に取り組んだ生徒たちは、中3の後半には教員の指示なしでも探究活動を進め、その成果物を形にすることができるようになる。たとえば、本校では例年、中3生から複数のチームが日経ストックリーグ^{【注6】}にエントリーしている。日経ストックリーグでは、現代社会の特徴や課題を捉えた投資テーマを設定し、関連企業や研究者への取材活動を通して見識を深め、投資銘柄を選定する基準を独自につくりあげてバーチャル株式投資を行ったうえで、考察を30枚以内でレポートにまとめる。半年以上の長丁場になるこの探究的な学習において、テーマの設定、取材の依頼からお礼までの手続き、金融や投資に関する知識習得、そして執筆に至るまで、生徒は教員の指示で動くのではなく自分たちで判断して学習を進める。教員はあくまでも研究テーマやレポートの構成へのアドバイザーに徹する。

このような自律的探究力は、基礎学力が高い生徒なら元来もっている、というものではない。地域研究の学習過程では、研究の基本姿勢に始まり、校外の大人と接する際の社会的なマナー、基本的なICTツールの使い方、探究テーマや取材時の質問事項の例示まで、教員が教える部分は実に多い。また、実際にやってみて失敗を経験することも学習上欠かせない要素といえる。こうした一連の学習の結果として、本校生徒の大半が、中3後半の時点で自ら探究する力の基礎を有していることになる。

地域研究の宿泊行事が行われるのは5月下旬だが、その事前学習は前年12月ごろに始まる。まず初めに、中1には「地域を研究するとはどういうことか」という基本的なガイダンスが、中2以上は次年度のフィールドに関する入門的なレクチャーが実施されることが多い。その後で生徒各自が関心のある分野（歴史、文化、産業、経済、自然、環境など）を報告し、関心分野が似ている者を集めて班を編成する。班編成後は、班内で討議を重ねながら研究テーマと問い（リサーチ・クエスチョン）を絞り込む。そして、テーマと問いに対して適した取材対象となる訪問先を挙げ、優先度の高い順に取材の申し込み（アポ取り）を行い、当日の行動計画を確定させていく。当日の取材の後は、報告書を作成するほか、同行していない生徒・教員を相手にポスターセッションやプレゼンテーションをする機会を設ける場合もある。

こうした地域研究における探究活動の過程について、生徒自身がまとめたものが次の図2である^{【注7】}。

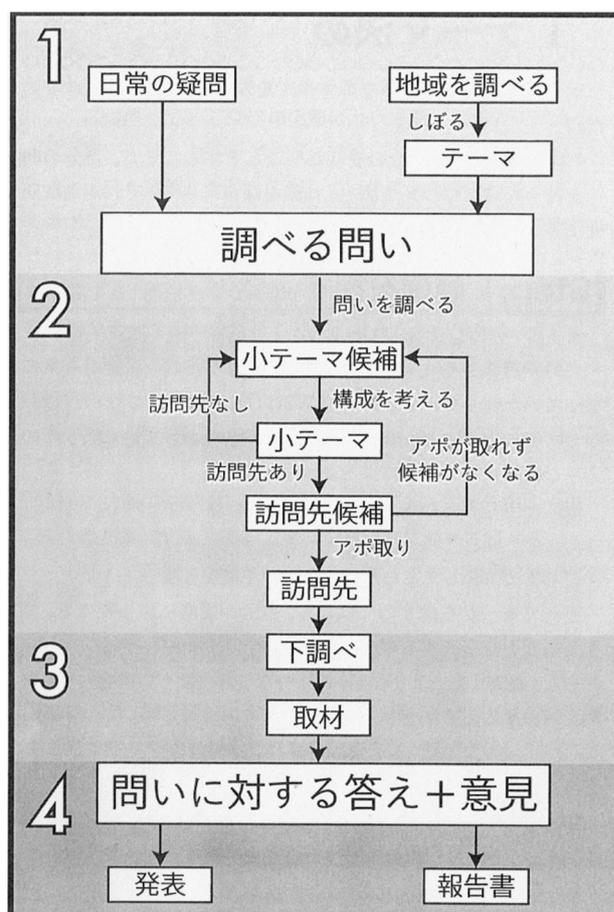


図2 生徒が図解した地域研究の流れ

以下では、①研究テーマの設定、②取材・フィール

ドワーク、③研究成果の報告、という探究活動の具体的な場面ごとに、学習のあり方をみていく。

2.2.1 研究テーマの設定

個人の関心分野に基づいて前年度の3学期に班編成がなされた後は、班ごとに研究テーマを絞り込み、リサーチ・クエスチョンを設定する。

実際に生徒がどのようなテーマを設定しているか、みてみよう。まずは初めて地域研究を実施する中2の例である(図3)^[注8]。中2の場合、前年度の3学期はフィールドワークの基礎指導にあてており、班編成とテーマ設定は実施年度の4月に行っている。

東京オリンピックにおける科学技術
AI, AI 技術
羽田にアクセスする新路線はどうあるべきか
寺社を取り巻く環境
住みよいまちづくり
食品開発の過程
ネット広告について
Free Wi-Fi の運営する側の状況
高架下空間の利用
東京オリンピックの外国人対応
職の安全について
最先端の医療
e-sports について
東京ピックサイトの経済効果
東京オリンピックの成功に向けて
首都に迫り来る自身への対策
バイオマス発電の普及について
食品ロスについて
東京五輪に向けた交通面での取り組み
東京オリンピックパラリンピックにおける外国人対応
株式制度について
情報セキュリティ
東京の漫画文化について
国民を守る仕事

図3 東京地域研究の研究テーマ例

2018年5月にフィールドワークを実施した学年の例であるが、東京オリンピック・パラリンピック関連のテーマが多いことがわかる。同年2月に平昌オリン

ピックが終わって「次はいよいよ東京」という気運があったことや、開催に向けた街中の変化を観察できたであろうことが背景にあるといえるだろう。また、食品ロスやバイオマス発電など、社会や科学分野の注目すべきトピックをテーマに選んだ班もある。このように、中2の段階では生活経験やメディアを通して目についた社会的な事象が人気テーマになる傾向がある。

続けて、高校2年生が実際に設定したテーマの例が下の図4である^[注9]。

ゆるキャラブームは終わったのか
KANSAI in the World
京都・奈良の和菓子業界の現状と展望
観光地と交通について
伝統工芸産業と地域とのかかわり
歴史的建造物の再建
関西の「すし」
都市計画の違い
時代ごとの建物の移り変わり
現代に受け継がれる日本の伝統技術
柿の葉寿司をめぐる
街～人の集う地、文化集う地～ 門前町の事例研究より
木造建築の現状と保全
関西のサッカー
関西における自然と景観の保護と継承
名物料理と地理的關係
奈良と京都の観光施策の違い
交通の要所における特産品の販売戦略
宇治茶の現状
関西における外来種
関西における街づくりの形態
地域から見る街道
関西の和菓子を支えるブランドの力にせまる
京都・奈良における観光政策
自然を利用した観光地の観光資源
関西の味噌文化
旅行プランを考える
古都京都・奈良の街並み保全

図4 関西地域研究の研究テーマ例

関西という生活経験からは離れたフィールドだが、事前学習によって注目すべきトピックを各班が独自に見出していることがうかがえる。

では、このようなテーマ設定はどのような過程を経てなされているのだろうか。生徒がまとめた『地域研究ガイドブック』では、①疑問を探す、②テーマを絞

る、③テーマから問いに変える、という3つのステップが示されている【注10】。このうち、②については、さらに以下のようなポイントが挙げられている。

- ・訪問可能な範囲か
- ・情報を聞き出せるかどうか
- ・資料が多くあるか
- ・問題点に対して多くの意見があるか

テーマの検討は、自身の疑問を出発点としつつも、妥当な研究方法を実行できるかという観点をふまえて進められる。また、「問題点に対して多くの意見があるか」というポイントは、自分の疑問を解決するだけでなく、他者と共有し議論できるような問いをつくらうとする意識につながっている。

テーマの設定に関連して、取材前の段階で研究の出来を左右するのが文献調査である。一般に、地域を対象とするフィールドワークでは、現地調査に加えて文献調査が欠かせない【注11】。書籍資料を通して、中長期的な視野で注目すべきトピックを知ったり、地域の特徴を捉えるユニークな視点を獲得したりすることが、研究テーマの設定のみならず、現地調査での観察眼や鋭い質問力にも大きな影響を与える。近年では、書籍というよりウェブ上で入手できる記事が文献調査の代替となりがちな傾向がみられるが、多くの場合、ウェブ上の記事は情報や視点が断片的・一面的であり、それだけでは探究に深まりが出ない。書籍に触れることをいかに促すかは指導上の課題である。そのための一つの仕掛けとして、たとえば図書室に地域研究の関連書籍コーナーを設ける取り組みがなされている(図5)。地理、歴史、文化、地学、ビジネスなどジャンルは多岐にわたり、読みやすいガイドブックから専門書まで硬軟混ざった選書である。本校司書は生徒の興味・関心に加えて1年間の教育活動の流れも熟知していることから、このような仕掛けが可能となっている。



図5 図書室の地域研究関連書籍コーナー

これに加えて、過去の地域研究の報告書も図書室で閲覧できるようになっており、自分たちの関心と近いテーマは先行研究として参考にすることになる。ただし、同じ問いを掲げても興味深い研究にはならないことは生徒もよくわかっており、報告書の目次には毎年異なるテーマが並ぶことになる。このようにして、生徒は問い(リサーチ・クエスチョン)を立てる力を身に付けていく。

2.2.2 取材・フィールドワーク

取材にあたっては、電話やメールで内諾を得て、依頼状・質問票(図6)を送付する。

東京地域研究 質問票		班	代表者氏名
テーマ			
研究内容(小テーマ)			
訪問先			
所在地	〒		
電話	- -	FAX	- -
		ご担当	様
訪問予定日時	5月 日() 時 分頃		
訪問生徒(班員名)	合計 名		
訪問生徒代表	および 連絡先		
訪問の目的			
質問事項	_____ _____ _____ _____ _____		
研究の経緯	_____ _____ _____		

図6 訪問先に事前送付する質問票の様式例

たとえば「東京オリンピックにおける科学技術」をテーマにする班の場合、無人(自動運転)タクシーの導入を進める企業や、産業技術の研究開発を行う研究機関などを訪問する。訪問先では、レクチャーを受けて質問をしたり、開発中の技術などを体験したりする。

重要なのは、自分たちが掲げた研究テーマに対して最も適切な訪問先を選ぶことである。しかし、これが意外と難しい。たとえば「東京オリンピックにおける

科学技術」というテーマの場合、該当する科学技術や関連する業界は実に多くある。興味深い事例をオムニバス式で紹介するのも悪くはないが、一つの研究としての統一感を出すことは困難であり、問い(リサーチ・クエスチョン)に対する答えも散漫なものになりがちである。

このような事態に対しても、生徒たちがノウハウをまとめている。前掲の『地域研究ガイドブック』では、次のように小テーマを設定して訪問先を絞り込む際の考え方が紹介されている(図7)。

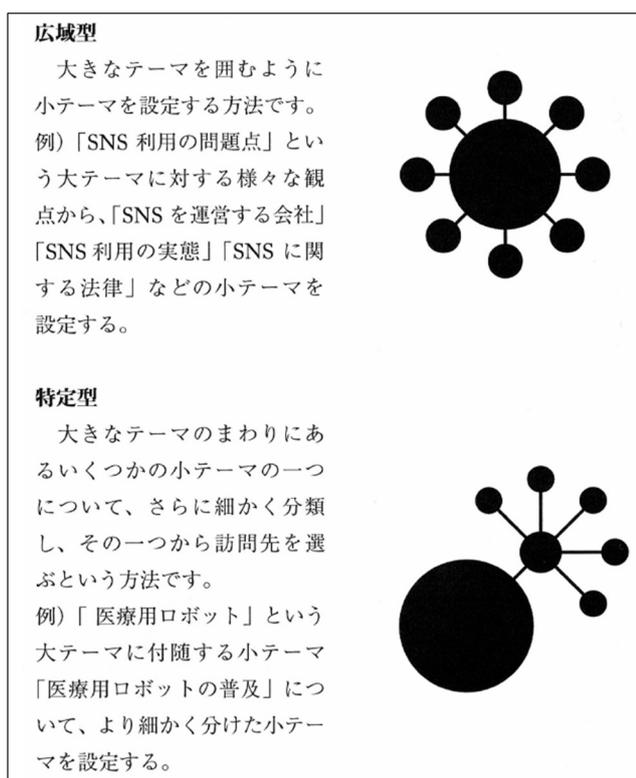


図7 小テーマを設定して訪問先を絞り込む方法

研究対象を絞り込むこのようなノウハウは、地域研究に限らず、研究一般に応用が利くものである。実際に、教科内外の探究学習においても生徒はこの技法を活用している。

訪問先候補を絞った後は、電話などで取材依頼を行う。この際、生徒組織である校外学習委員会によって、失礼のない受け答えや、訪問日から逆算して相手に無理を強いることにならない期限などについてレクチャーがある。しかし、そうした基本マナーが身に付いたとしても、下調べが不十分だったり、目的意識が不明確だったりすると、そもそも訪問の意図を的確に伝えることができない。また、複数の訪問先に同時並行で

取材の可否を問い合わせしていくため、研究上の優先順位もふまえて緻密に段取りをする必要がある。

取材当日は、どの学年も教員は同行せず生徒たちだけで、白のシャツに黒のパンツといったセミフォーマルな服装で、メモ帳やカメラ、レコーダーなどを持参して取材活動を行う。自分たちが知りたいことをうまく聞き取るためには、相手との関係づくりや的確な言葉遣いなど、コミュニケーションの力、そして積極性が求められる。この点では、特に中学生の段階では生徒間で差があることもあるが、班内でお互いに補いつけている。

2.2.3 研究成果の発表

5月下旬にフィールドワークを終えると、その成果を報告書の形でまとめる作業がある。加えて、ポスターセッションやプレゼンテーションによる発表会が企画されることも多い。この発表会はふつう7月に実施されるので、フィールドワークの後2か月ほどをかけて、研究成果のまとめをしていることになる。

報告書の作成は、Google ドキュメントを使った共同編集などクラウドサービスを活用した共同作業となることが多い^{【注12】}。完成した報告書は、訪問先に送付するほか、図書室にも収められ、後代の参考文献(先行研究)となる(図8)。



図8 図書室で閲覧できる歴代の報告書

報告書の構成は、研究要旨→はじめに→調査概要→調査報告→考察・まとめ→感想など、研究発表の基本的な形式に近いものになっている。執筆にあたっては先代のノウハウが共有されており、たとえば先述の『地域研究ガイドブック』には次のようにある^{【注13】}。

最初から最後のまとめまで、「答え」を導くストーリーの一貫性がわかるように書きましょう。これを意識せずに「〇〇ではこのようなことを学びました」と書くだけでは、各訪問先での取材内容・結果の羅列になってしまいます。何を調べるためにどのよう

なことをしてどのような結論が出たのかを、問いから答えに至る一連の流れを意識して書き進めましょう。

ここでも、地域研究における訪問取材に限らず、研究一般において意識すべきことが書かれているといえるだろう。教科の「調べ学習」などの場面でも、書籍やネット記事の内容をただ書き写す(いわゆるコピー)作業に陥ることがしばしばある。そうではなく、自身のリサーチ・クエスチョンを意識して、研究を通して得た結果も鵜呑みにせず、独自の分析・考察を加えて論理的に表現していくことが探究の条件である。

報告書に加えて、ポスターを作成してポスターセッションを実施したり、PowerPoint などを用いたプレゼンテーションの場を設けたりすることもある。ここでは文章による表現とは異なる、目の前の聴衆を相手にした表現力が鍛えられる。趣旨が明解で耳から入ってきやすい説明、意外性があり関心をひくトピック、グラフや図解など視覚的な資料の活用、そしてユーモアのある話しぶりなどである。また、わかりやすく興味をひくポスターデザインのコツについても、同学年や先輩の優れたポスターに触れることで徐々に意識されるようになる。

なお、近年では、Word やドキュメントなど文書作成ツールのほか、Adobe の Illustrator などグラフィックデザインのソフトを使う機会が増えてきた。以前は文化祭の広報担当など一部の生徒だけがもつスキルだったが、校内の生徒用 PC にソフトを導入したことで、上級学年を中心に学年全体で活用が試みられることとなった。今年度 Adobe Creative Cloud の個人ライセンス利用が可能になったこともあり、今後はますます活用の場が広がるものと思われる。こうした動向を受けて、地域研究においても、高校生を中心に、従来の報告書形式ではなくポスター集やパンフレットを採用するなど、成果を表現する形式がよりデザイン性を重視した方向へと多様化している(図9、図10)。高校生にもなると報告書形式がマンネリ化してくるが、新しいツールを導入して表現を洗練させる方策を示すことで、生徒の意欲を高める効果も見込まれる。



図9 パンフレット形式でまとめた例

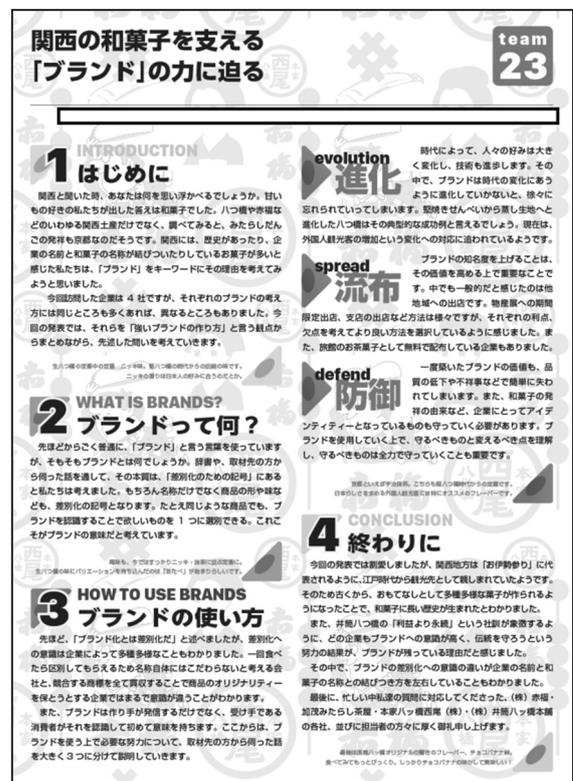


図10 ポスター形式でまとめた例

3 考察

ここまで見てきたように、地域研究を通して生徒は探究学習において必要となる汎用的な資質・能力を身に付けている。この点に関して、ここまでたびたび引用している『地域研究ガイドブック』において、生徒自身が次のように総括している【注14】。

「なぜ地域研究をするのか」…（中略）…「なぜ地域研究はこんなに楽しいのか」この2つの問いは同じ2つの答えを持つ。

1つ目は、新たに知識を得られるからである。地域研究はその地域の中で自分が興味を持ったこと、疑問に思ったことを調べる。したがって、自分の好きなことをより深く知ることができたり、疑問に対する答えを得ることができたり、その後もテーマについて関心を持つことができたりする。このほかにも、普段は入れないようなところに入れたり、様々な体験が出来たり、様々な人に取材したりするので、多くの経験を得ることができる。ここで得た知識・経験は、世界観・視野を広げてくれる。だから知識を得ることは面白く、楽しいことなのだ。

2つ目は、新たな能力を得られるからである。地域研究は、テーマを決めて取材し、それを発表するまでの流れが重要である。そのときに必要なのが個人の力である。全体を意識して計画する力や、取材のときの団体行動と礼儀、発表するときの相手にわかりやすく伝える力、要所で班員と話し合う際のコミュニケーション能力を身につけることができる。

ここで身につけた能力はこれから様々なところで発揮される。1回目では実感することは難しいが、次の研究でよりスムーズに計画が進んだり、作業出来たりすると、自分の成長を実感することができて、地域研究を面白く感じるができるだろう。

特定の教科や領域、さらに教室での学びの範囲を超えた横断的・総合的な学びをもたらす地域研究の特性を、包括的に語った文章である。地域研究を通して学習者個人が得た「新たな能力」が様々な探究的な学習につながることも的確に認識されている。

「その後もテーマについて関心をもつ」こと、そして「世界観・視野」の広がりへの言及は、地域研究における探究がその場限りで完結するものではないことを示唆している。地域研究の記憶が薄れてきても問題意識は残り、経験を通して視野を広げる中でまた新たな

な疑問や関心が生まれ、次の探究へと発展していくのである。このように、地域研究を起点として、探究的な学習がスパイラル状に生起して深まっていくものと捉えられている。

このような学びの連関は実際に起こっている。たとえば、先に言及した日経ストックリーグにおいて、2018年度（第19回）に本校高1生徒チームが最優秀賞に選出された。その提出レポートは「消費で応援、災害を乗り越えろ！」と題されている【注15】。このレポートでは、東日本大震災の後注目された「応援消費」に着目して投資テーマが設定されている。彼らが「応援消費」に着目したきっかけは、チームメンバーの一人が中2の東京地域研究で得た問題意識にあるという【注16】。この生徒は「メディアと震災時の対応」を研究テーマにし、震災・原発事故に伴う風評被害という社会的な課題に取り組んだ。そこで、社会的な課題の解決の方法として経済活動が重要である、という認識に至った。その問題意識が芽となって「応援消費」というコンセプトに結実したのである。また、このチームの生徒たちは、中3での震災学習を含む東北地域研究の後、自分たちで被災地を回るバスツアーに参加したという。このケースは、地域研究を通して得た関心を継続させ、自ら見出した新たな探究活動へとつなげて優れた成果をあげた事例といえることができる。

先に引用した生徒による総括には、もう一つ注目すべき点がある。それは、学習全体の「流れ」を意識して計画する力や、「次の研究でよりスムーズに計画が進む場面などへの言及である。ここには、学習の見直しをもつこと、学習方略を自ら見直すこと、そして学習過程を俯瞰して自分の成長を実感することなど、自律的な学習者の条件ともいえる要素がうかがえる。これらの要素は、自己調整学習の理論を背景に学習指導要領等における基本用語ともなっている「学びに向かう力」、そして評価の観点ともなる「主体的に学習に取り組む態度」と深く関わっている。

また、同様に生徒が言及している「伝える力」「コミュニケーション能力」などは、従来の認知的スキルにとどまらない力、たとえば他者と協働する力や他者にアピールする力などが地域研究を通して育成されていることを示している。地域研究を行う班は、もともとは関心を同じくする共同研究者の集まりであるが、同時に宿泊行事において多くの生活時間を共にする集団でもある。研究だけでなく様々な場面で人間関係が醸成されてくることで、協働的な学習はいつそう効果的になっていく。

『地域研究ガイドブック』などにみられる生徒の振り返りからは、こうした多方面に及ぶ資質・能力の形成過程について、学習者である生徒自身がメタレベルで認識できていることがうかがえる。このような認識はおそらく、多くの学校で実施されている1回限りの修学旅行では生まれえない。フィールドが違って学習過程の構造を同じくする地域研究をくりかえし経験することで、前回までにできたこと・できなかったことを意識し、学習をもっと洗練させようという自覚が生まれるのである。

最後に、これらの学習活動が学校行事と地続きで実施されることの意義に触れておきたい。まず、宿泊を伴う学校行事と連携させることで、探究のフィールドとなる地域に長く滞在することの効果は大きい。フィールドワークにおいては、目的をもった調査活動だけでなく、五感で体験するその場でしか得られない感覚や、現地で偶然に新たな関心事と出会う体験がきわめて重要である。教科の学習の中でそれだけの時間を捻出することは難しい。

加えて、学校行事が生徒の自治の場であることにも意味がある。本校の他の学校行事と同様に、地域研究は生徒組織（校外学習委員会）によって運営される。移動バスの行程表を作成するのも、学年全体に指示を出すのも、就寝時の見回りをするのも校外学習委員会の仕事である。さらに、各班が提出するテーマ案、行動計画書、報告書などは、すべて校外学習委員会によるチェックを受ける。また、現地において、毎日就寝前に各班の班長と校外学習委員が集まり、1日の行動の様子を報告し合い、反省すべきところを翌日に改善するための会議（通称：班長会議）を行う文化もある。このように、学校行事を生徒の自治の場として機能させる学校文化が、その中で行う探究学習の主役は自分であるという自覚に根底でつながっていると考えられる。

4 おわりに

本稿では、学校行事と総合的な学習の時間が重なり合う活動である地域研究を分析対象として、それが自律的な探究者としての資質・能力を育成するものであることを示した。特に高校段階において「総合的な学習の時間」から新課程「総合的な探究の時間」への過渡期にあることをふまえると、伝統的な教育活動の意義を探究的な学習の観点から捉え直していくことは重要である。果てしなく続く教育改革の中で次々と目新

しい教育課題が見出される昨今ではあるが、流行の理論や抽象的な時代認識から新たな活動を演繹していくよりは、生徒・教員がその意義を確信して継承してきた実践をアップデートしていく方が教育効果は高いだろう。

一方、生徒・教員が長年にわたって維持・発展させてきた学校行事には、その根底において学校文化ともいべき規定要因があり、どの教育活動においても暗黙裡に生徒の学びに影響を与えている。したがって、学校行事と総合的な学習の時間を貫く資質・能力の育成のあり方を捉えるには、地域研究だけを分析するのではまだ断片的である。今後は、同じく学校行事と総合的な学習の時間が重なり合う文化祭（総合活動）を対象として分析を進め、生徒の資質・能力が学校文化と関わりながらどのように形成されていくのかを複層的に捉えていくこととしたい。

【注】

- 1) たとえば、吉川ほか（2006）が学校行事と生徒の心の安定に注目している。その他、岡崎ほか（2001）なども、学校行事を経験するサイクルが生徒の精神的な成長過程に影響を与えていることを示唆する。なお、これらの研究成果は本校ホームページ内の「生徒の人格形成と6年間の心の成長」に関する記述にまとまっている。
- 2) 根津・井上・田中（2004）。この研究では音楽祭が分析対象となっており、社会学的な枠組みをふまえて観察ノートや挿話の中での発話を分析している。リーダーシップがどのような資質・能力であるかを詳述しているわけではないが、資質・能力が形成されていく場を描いた先行研究といえる。
- 3) たとえば、植村ほか（2015）など。
- 4) 文部科学省（2009）。
- 5) 同前。
- 6) 日本経済新聞社が主催、野村ホールディングスが共催する、株式投資のコンテストである。
- 7) 65期テーマ学習「地域研究ガイドブックをつくろう」選択者編著（2018）『地域研究ガイドブック』。総合的な学習の時間の一環であるテーマ学習（少人数ゼミ形式の講座）において、中3生徒が地域研究のノウハウをまとめたものである。2013年に作成されて以来、年ごとに有志生徒によって改訂が加えられている（非売品）。
- 8) 『2018年（71期）東京地域研究報告書』目次より。

- 9) 『2016 年度（66 期）関西地域研究報告書』目次より。
- 10) 前掲『地域研究ガイドブック』。
- 11) 吉本（2019）。地域研究の枠ではないが、本校生徒によるフィールドワーク（社会科の水俣学習）が事例として掲載されている。
- 12) 現在本校は G Suite for Education を採用しているため、Google ドキュメントや Google ドライブが主に活用されている。それ以前には Microsoft の Office365 を共通ツールとして運用したこともある。クラウドサービスを用いた生徒間の共同作業については、前掲の植村ほか(2015)に加え、植村ほか(2016)で報告されている。
- 13) 前掲『地域研究ガイドブック』。
- 14) 同前。
- 15) チーム 2 B（2018）「消費で応援、災害を乗り越えろ！」第 19 回日経ストックリーグ提出レポート。このレポートは中学生・高校生・大学生の 3 部門全体での最優秀賞を得た。2021 年 1 月現在、日経ストックリーグの公式サイトで閲覧できる。
https://manabow.com/sl/result/19/pdf/19_01.pdf
- 16) 『日経ヴェリタス』2019 年 5 月 5 日号。受賞チームへの取材記事が掲載されている。
7. 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領」。
8. 吉川範子ほか（2006）「学校行事が心の安定度に与える影響について」『筑波大学附属駒場論集』第 46 集。
9. 吉本健一（2019）「調査・発表学習やフィールドワークにどう取り組むか」和井田清司ほか編『中等社会科 100 テーマ』三恵社。
10. 65 期テーマ学習「地域研究ガイドブックをつくろう」選択者編著（2018）『地域研究ガイドブック』。
*このほか、各年度の『地域研究報告書』や発表会資料を分析対象とした。

【参考文献】

1. 植村徹ほか（2015）「オンラインストレージを利用した生徒の共同作業：中学総合学習 B 「東京地域研究」の報告書作成を通して」『筑波大学附属駒場論集』54 集。
2. 植村徹ほか（2016）「オンラインストレージを利用した生徒の共同作業（第 2 報）：中学総合学習 C 「東北地域研究」を通して」『筑波大学附属駒場論集』55 集。
3. 岡崎勝博ほか（2001）「中高 6 年間における「心の成長過程」の分析」『筑波大学附属駒場論集』第 41 集。
4. 岡崎勝博ほか（2002）「中高 6 年間における「心の成長過程」の分析 第 2 報」『筑波大学附属駒場論集』第 42 集。
5. 根津朋美・井上正充・田中統治（2004）「中高一貫校の異年齢構成による学校行事が果すリーダー形成機能」『カリキュラム研究』13 号。
6. 森田真樹・篠原正典編著（2018）『総合的な学習の時間』ミネルヴァ書房。